

08

期日：9月8日（水） 15：03／2122教室

08測－1P－K16

男女大学生の骨密度とスポーツ実施種目との関連

○池上 久子（南山大学）、鶴原 香代子、松田 秀子（愛知淑徳大学）、村本 名史（山口福祉文化大学）、
加藤 恵子（名古屋文理大学短期大学部）、田中 陽子（成城大学）、中島 悦子（戸板女子短期大学）

男女大学生の骨密度の測定結果から3群に分け、スポーツの実施状況、過去のスポーツ経験、現在および過去のスポーツ実施種目との関連を男女別に群間で検討することによって、将来の骨粗鬆症予防対策のための生活指導の資料を得ることを目的とした。対象者は愛知県内および関東の大学4校、短期大学2校の6大学で、研究の趣旨や内容を十分に説明し同意が得られた男子学生349名、女子学生609名の合計958名であった。骨密度は骨量測定装置の一つである超音波骨密度測定装置（FURUNO社製CM-200）を用いて、右踵骨に超音波を照射し超音波伝播速度を測定した。男子は、現在のスポーツ実施者は約71%、小学校では約83%、中学校では約90%、高校では約76%であった。一方、女子は、現在のスポーツ実施者は約36%、小学校では約59%、中学校では約70%、高校では約48%で男子に比べ低くなっていた。男女ともに骨密度の低群、中群、高群の順に現在も過去もスポーツ実施者は多くなり、逆に非実施者は少なくなっていた。男性では野球、サッカー、バスケットボール、卓球、陸上競技で、女性ではバスケットボール、バレーボール、テニス、バドミントンで骨密度の高いものが多くいた。

08

期日：9月8日（水） 15：15／2122教室

08測－1P－K17

韓国男子中高生の生活習慣、体格および体力に関する調査

○辛 紹熙（金沢大学イノベーション創成センター）、出村 慎一（金沢大学大学院）、野田 政弘（仁愛大学）、
山田 孝禎（福井工業高等専門学校）、出村 友寛、川端 悠（金沢大学大学院）

本研究ではソウル市内の男子中学校2年生148名（年齢13.8歳、身長165.5cm、体重57.9kg）および高校2年生327名（年齢16.8歳、身長173.9cm、体重65.0kg）を対象に、生活習慣調査（食事、睡眠、健康関連意識、身体活動量等）、体格・体力測定、および自身の体型の主観的評価を実施し、年代差を検討した。高校生は、全ての体格項目において、有意に高値を示した。中高校生とも、身体活動は低強度の活動を実践する割合が高かったが、中学生の方が高校に比べ高強度の活動を実践する割合が高かった。体力は、50m走、上体起こし、立ち幅跳びでは高校生が、長座体前屈では中学生が有意に優れた。生活習慣に関する調査結果では、睡眠および主観的体型に関する項目のみ年代差が認められ、高校生の睡眠時間は短く、主観的に自分の体型を「痩身」と認識していた。韓国の中高生は、健康な生活習慣に対する意識・関心は高いが、実際の行動や生活習慣は必ずしも良好ではない傾向であった。

08

期日：9月8日（水） 15：27／2122教室

08測－1P－K18

柔道選手の筋力発揮調整能に利き手、非利き手間の差はあるか？

○久保田 浩史（岐阜大学）、出村 慎一（金沢大）、長澤 吉則（京都薬科大）、
池本 幸雄（米子高専）、渡辺 涼子（金沢学院大）

本研究の目的は、柔道選手の筋力発揮調整能における利き手・非利き手間差を検討することであった。柔道群として柔道選手28名（柔道歴4年以上の有段者）、対照群として把握動作を伴わない運動種目選手27名（サッカー選手18名、陸上競技選手9名）を対象に、最大握力および筋力発揮調整能を測定した。最大握力は1分の休息を挟み2回測定し、最大値を代表値とした。筋力発揮調整能は、最大握力の5～25%の範囲で規則的に変動する要求値を握力発揮にて40秒間追従するテストで3回測定した。筋力発揮調整能評価変数は開始15秒以降終了までの要求値と発揮値の誤差の総和とし、2および3試行目の平均値を利用した。最大握力は、両群とも利き手が非利き手に比べ有意に大きかった。群間差は非利き手のみに認められ、柔道群が対照群に比べ有意に大きかった。筋力発揮調整能評価変数は、両群間に有意差はなかった。対照群では利き手が非利き手に比べ、筋力発揮調整能に優れていたが、柔道群では利き手と非利き手間に有意差はなかった。よって、対照群の傾向とは異なり、柔道選手の筋力発揮調整能に利き手、非利き手間の差がないことが示唆された。